令和6年度

学校評価書

大津市立打出中学校

【評定（達成度）の目安】

達成度	指　　標
A	満足できる
B	どちらかというと満足できる
C	どちらかといえば課題がある
D	課題がある

《校訓》 明朗・闊達　自主・力行

《教育目標》
自信と誇りを持ち　夢と志を育む教育

《めざす生徒像》
う　打ち出す力　挑戦する生徒
ち　智恵を出し合い心耕す生徒
で　伝統を大切にして地域を愛する生徒

大項目	中項目			小項目		自己評価 小項目評価	自己評価 中項目評価	自己評価 現況	学校関係者評価 中項目評価	学校関係者評価 意見、提言等	今後の学校改善に向けて
1 基礎・基本の徹底と個性を伸ばす創意ある教育の推進	1		主体的・対話的で深い学び	1	支持的風土を育てる学級・学年集団づくりを実践することができた。	A	A	・現状の授業内容に「校内研で学んだ」メソッドを導入しようと努力していただいているのが現状だと考える。ただ、校内研のメソッドを導入するということは、授業の「手段」を研修しようとするのが校内研であるという誤解を受けやすい。授業研は教師を見るのではなく「生徒を見る力」を養うようになっている。 ・何を教えるのか、どうやって教えるのか、ではなく、どういう生徒を育てるのかという視点で語ることができていなかった反省がある。校内研は、授業を良くする手段ではなく、全教科が目指す「目標」である。主体的・対話的で深い学びができる生徒を育てるという視点で研究をしていくことも検討していかねばならない。	A	・主体的、対話的で深い学びに取り組んだ生徒は2024年全国学調から正答率、自己有用感、幸福感等が高く、自分で学び方を工夫していると言われています。社会的、経済的背景が低い状況でも、正答率が高い傾向にあるとされていることから、幸せを実感できる授業改善等、研修の充実と教育技術のレベルアップで学習が好きになる生徒の割合が多くなることをお願いします。 ・現況の考察は共感でき、しっかりした方向で研鑽されているのが素晴らしいです。教師中心の（工夫や技能の駆使）指導でなく、生徒一人ひとりの成長を見据えた教師の視点とふり返りは大切にしてください。	・各教科の指導方法や指導計画の是非は、教科部会やメンターによる個別の研修、研究主任や講師と授業者との連携を強め、校内研全体会との住み分けが必要。 ・なんとかして今の授業を「主体的・対話的で深い学び」にシフトしていけないか、という視点ではなく、「主体的・対話的で深い学びができる生徒を育てるにはどうすれば良いか」を研究するスタンスに切り替えていく必要がある。 ・なぜ教師の指導ではなく「生徒を見る」研究授業をするのか、について十分な説明と周知が必要。
				2	協同する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善を図ることができた。	A					
				3	主体的・対話的で深い学びを追究する授業研究や研修会ができた。	A					
	2		道徳教育	4	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる活動を実施することができた。	A	A	・学年で年間、学期ごとの指導計画を作成し、内容項目に的を絞った指導案作成を心掛けることができた。 ・各学年の道徳担当と担任を中心に、授業前の指導案検討や授業後の振り返りの機会が充実してきた。 ・授業者が同じ教材で複数回の授業を実施することで、指導力の向上を図ることができた。 ・道徳教育における全体での研修の機会をなかなか持てないことが課題である。 ・道徳公開授業を開催することができた。	A	・道徳性等、質の高い教育を求める声がある中、道徳授業の公開等、教科としての道徳を保護者等に啓発されていることに働き方改革が進む中で、ご尽力されていることに感謝します。 ・教師のみの授業でなく、外部有識者による道徳教育も必要か。 ・男子中学生達の挨拶が素晴らしい。 ・指導研究や数回の授業実施等、丁寧に取り組まれ感心です。先生方のキャラクターを大切な武器とした道徳も楽しみです。	・公開授業を年に2回は設定する。 ・各学年で課題となる内容項目に目を向け、年間の指導計画とともに、学期ごとに見直しながら、タイムリーな指導も積極的に入れていく。 ・職員による授業公開や研修の機会を増やし、学校全体として道徳教育のレベルアップに努める。 ・各学年での教材研究の時間をより密度の濃いものにしたい。 ・OJTの機能（メンター・メンティー）の活用をし、道徳授業の充実を図る。
				5	道徳の授業研究や資料の開発・整備・交流ができた。	A					
				6	保護者等への道徳の授業公開ができた。	A					
	3		体力づくり	7	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善を図ることができた。	A	A	・体力向上プログラムとして、全学年にリズムジャンプストレッチを取り入れた。動的な動き・ストレッチを組み合わせた動きを継続的に行うことで生徒の怪我防止・体力向上・パフォーマンス向上を促せた。 ・めあて、振り返りの授業の流れを構築し生徒主体の授業展開を定着することができた。 ・体育祭の種目内容を検討しルール改正をしたことで、生徒がより円滑な競技進行に力を注げた。 ・全学年開催することで、学年間の交流や他学年の生徒を応援する姿が生まれ、各学年で体を動かす力を出し切る雰囲気が高まった。	A	・従来の体育の授業はスポーツカーストを生むと言われた側面がある中、体育祭等で工夫されて、運動を生涯楽しむ生徒が増えているように感じました。 ・体力作りにおいては、全国値との比較も気になりますが、全校的なプログラムを実施されて成果を出されていることは、大いに評価できると思います。登下校の坂道効果はどうですか？ ・体力も大切かと思います。学力と両立できるよう期待しています。	・運動に苦手意識のある生徒も意欲的に取り組める授業内容の検討を進める。苦手な生徒にフォーカスして運動課題の難易度を段階的に設定し、やってみたいと思える魅力的な授業を作る。 ・活動時間を多く取り入れ、基礎体力の向上につなげる。また、体幹トレーニングやリズムトレーニングなど自宅でも取り組むことができるトレーニング方法の紹介などを日々の授業で取り入れていく。さらにケガ予防のトレーニングやストレッチ等を行うことで、日常生活における対策を講じる。 ・ICT教材を効果的に活用し、生徒の理解を促す一助とする。より使いやすい環境整備を行う。 ・二人一組やグループ活動を多く取り入れ、「学び合い学習」をさらに活発なものとする。 ・運動やスポーツを「する」だけでなく、「見る」「支える」などの関わり方を全体に周知することで運動やスポーツ、自身の健康づくり・体力づくりに役立てるような働きかけをする。
				8	体力づくりを推進する運動を実践することができた。	A					
				9	体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲を育成することができた。	A					
	4		体験活動	10	各種体験活動を積極的に実施することができた。	A	A	・校外学習や修学旅行を実施することができ、豊富な体験活動を行うことができた。 ・2年生では、職場体験学習を3日間において90事業所で学年一斉で行うことができた。また、体験前には、外部講師を招いてマナー講座や職業講話を行うことができた。 ・体験活動のまとめでは、iPadを用いて、グループおよび個人でレポートづくりを工夫して行うことができた。学期末懇談会に合わせて生徒の作品を展示して、保護者の方々に活動の様子を見てもらうことはできたが、保護者に発表会などの案内ができなかったことが課題である。	A	・地域や社会がよくなるために何かしてみたいと考えている生徒が増えていると聞いています。地域や関係機関の行事に参加する割合が増える体験活動の充実を願います。 ・体験した感想は保護者にも話す様にして、家庭での教育にも活かすように。 ・職場体験学習は3日間であったが、近隣校では5日間行っている所もある。期間設定に学習的な意図があるのか？ ・学習のふり返り、レポート造り、発表等、より体験活動が充実してきます。発表会は観たいです。 ・保護者としては、発表会の様子は知りたいが、公開となると緊張する生徒も出てくると思うので、ダイジェストを動画や文章で見られるだけで充分。 ・体験学習は良いと思います。もう少し日程が長ければ違った経験もあるかな（難しいことはよくわかります）	・今後も、各学年において、校外学習・職場体験学習・修学旅行などの体験活動を軸に様々な活動をしていくことが必要である。体験活動を行うに伴って、事前学習や事後学習の質を高めて、子どもたちが行った活動をさらに有意義なものにする。 ・体験活動の成果を他学年にも広めていくことが求められると考えられる。現在は各学年の廊下に活動の様子や事後学習のポスター発表を掲示しているが、他学年の生徒は見ることができない状況である。他学年の活動の様子が知れるような場を設けるなどの工夫をしていく。 ・今年度は第1学年では葛川自然体験と大津市で環境と文化の体験を通して学習を行い、第2学年では3日間の職場体験を通して地域社会との交流を深めることができた。地域との関わりを持てるような体験活動を行っていくことで、地域と今後も関わりを持ちたいと思えるような意識をつけさせる。
				11	活動後の発表会等、学習のまとめができた。	A					
				12	保護者等に発表会等を案内し、参加があった。	B					
	5		読書活動	13	全校一斉読書活動ができた。	A	B	・図書ボランティアの方々の協力により、図書室運営や選書会、蔵書点検などを実施することができた。 ・文化委員が図書室通信を発行し、本に対する興味を高めることができた。 ・国語、理科、道徳の時間で図書室の利用を行うことができた。しかし、図書室を利用する授業が広がらないことも課題である。 ・教師用図書を職員室に設置することにより、職員が本を手に取りやすい環境を作ることができた。 ・学級文庫を10冊各クラスに設置し、朝読書の際に活用できるようにした。	B	・朝読書を実践されていますが、本を読む生徒さんと読まない生徒さんの2極化が進んでいるのでしょうか。生徒さんの読書の量と質については分かりませんが、図書ボランティアのみなさんの協力を得て、不読率の低減に向けた図書館の利用・活用をお願いします。 ・在校生保護者への図書ボランティアの取り組み案内方法を再検討すべきである。 ・読書をしたい子、ふらっと中に入ってくる子、それぞれの過ごし方で図書室を利用できてきている。蔵書点検では、先生方にもお手伝いいただき、日頃お話しできない方とも交流がもてたことがよかった。 ・ビブリオバトル的なものは。図書室の工夫、活用に期待します。 ・検索で出てくる情報は2次資料であることが多いので、1次資料であろう書書物に触れるのはいいと思う。 ・朝読書は打出中の伝統ですね。 ・図書が充実していると思うので、活用できるようお願いします。	・図書ボランティアの方々と協力しながら、図書室運営や蔵書点検を継続する。また、連絡を密にし、情報共有を図る。 ・文化委員通信や図書室の掲示などにより、生徒が本に興味を持つことができるような手立てを行う。 ・タブレットと併用して図書室の蔵書を使っての調べ学習を行う。専門書が少なく、調べ学習を行うことが難しい部分もあるので、予算の一部は教科の先生からの図書の購入希望に沿って購入する。 ・全学年を対象とした開館を行い、生徒が図書室に訪れやすいようにする。 ・選書会を継続して行い、生徒の意見を購入図書に反映する。 ・リーディングトラッカーを置くなど、誰もが利用しやすい図書室の整備を行う。
				14	授業等で図書室を活用することができた。	B					
	6		指導改善 （組織的・計画的）	15	学力向上を目指した指導体制・指導方法の工夫改善を図ることができた。	A	A	・年度初めに研究テーマについて確認し、校内研究会を行い、授業づくりについての理解を深めるなど、指導方法の工夫改善に向けて組織的に推進することができた。 ・若手教員を中心としたOJTでは、年間を通して「授業づくり」をテーマとした研修を実施し、若手教員の授業力の向上につながった。また、各学期が始まる前に、研修会を行い、学期前の不安を取り除くことができた。 ・全国学力・学習状況調査の結果を分析し、根拠や理由を明確にして自分の考えを表現できるよう授業改善を行うことを共通理解した。さらに、質問紙の結果を受けて、教科部会で分析を基にした話し合い、情報を交流し、教員の授業改善に役立てることができた。 ・夏季休業中や定期テストの前に補充・質問教室を実施し、基礎学力の定着を図るなど、eライブラリの活用を促進するなど、タブレットを活用して学習保障を行った。 ・テスト2日目を部活動停止にして成績処理の時間を確保した。また、連絡アプリtetoruを活用して事務処理の効率化を行った。 ・毎週水曜日を部活動停止日とし、個人の授業研究や事務作業など時間を確保するように努めた。	A	・デジタル学習基盤が指導や学習のツールとなり、AI等が加速度的に発展する中、使いこなす豊かな人間性の育成をお願いします。一方、働き方改革が叫ばれ、先生方が授業の準備ができない程の業務量が多いと聞いています。選択集中、調整して先生方の心身の健康に留意してください。 ・学力向上は当然ではあるが、自分が興味を持つものに注力して学力を高めることも必要か。 ・全員が同時に教材研究や事務に専念できる時間確保は大切だと思います。 ・OJTで3S、ユニバーサルデザインの徹底も組織として大切です。	・校内研究、研修、OJTでの職員同士の学び合う体制を継続し、指導力・授業力の向上に努める。 ・教科部会を各学期1回の設定を継続し、「全国学力・学習状況調査」の分析などを基に授業について話し合い、教科の中で共通した課題を持って授業改善に取り組めるようにする。また、校内研究の取組についても確認し、より良い授業の提供ができるようにする。 ・効果的なICT活用についてさらに学びを深め、生徒の学習意欲の向上や個別最適化された学びにつなげる。 ・学習を苦手とする生徒の基礎学力定着の手立てについて、地域の人材や資源を含めた検討が必要である。次年度は朝学習などを行い、基礎学力の定着につなげていく。 ・校務端末の掲示板を毎日確実に確認することや会議資料を事前に目を通すことで、打合せや会議の時間短縮を図る。また、連絡アプリtetoruの活用により校務の効率化を進める。教材研究や子どもと向き合う時間を確保していく。
				16	教職員の指導力及び組織的な教育力の向上が図れた。	A					
				17	校務の効率化と教育活動の質の改善ができた。	B					

大項目		中項目			小項目	自己評価			学校関係者評価		今後の学校改善に向けて
						小項目評価	中項目評価	現況	中項目評価	意見、提言等	
2	地域に開かれた特色ある学校づくりの推進	7	育ちと学びを支える連携	① 家庭・地域との連携	18 保護者の子育てに対する積極的な支援ができた。	A	A	・入学式での説明や通信を通して、子ども支援コーディネーターの役割や中学校の取組について積極的に情報発信を行い、家庭との連携を推進することができた。子育てに不安を持つ保護者に対しては、思いに寄り添うと同時に、スクールカウンセラーや専門機関と連携した対応をとることができた。 ・ホームページの更新頻度も増えた。また、連絡アプリtetoruの導入により、保護者が確実に情報をキャッチできるようになった。生徒には、メタモジクラスルームに配付文書を提示するなど2重体制で情報共有が行えた。 ・あいさつ運動など、保護者の方々や地域の方々の協力をいただき、生徒を地域全体で見守っていくことができた。あいさつについては、教師が積極的に行うい、学校全体としてのコミュニケーションを大切にしていく姿勢を示すことができた。 ・避難訓練、不審者対応などの訓練を実施する等の防災教育を実施することができた。 ・3小学校へ年間を通じて「ぶらっと訪問」を行い、児童生徒の情報共有を早い段階から行うことができた。	A	・多様な保護者に対応される先生方もご苦労が多いかと思います。「テトル」等を学校運営委員に配信して、情報共有するのも地域連携の1つになると思います。また、コミュニティの存続が現実の問題となる中、社会参加、社会の担い手を育てる主権者教育の啓発推進をお願いします。 ・テトルやメタモジなどうまく活用されていると感じている。子どもとも保護者ともコミュニケーションをとることを大切にしてくださっている。体育祭でのお手伝い等、学校行事の保護者のお手伝いは「学校ボランティア」として学校が直接テトルで募集する形にしてはどうか。(より広く呼びかけられて、普段参加しない人が来てくれるかも…) ・ありえない事が起きることを想定して安心・安全な学校であるように努力してください。 ・災害に対する取り組みは社会的に大きな課題であり、学校での指導に於いて地域での役割等、積極的な指導をお願したい。	・「tetoru」導入に伴い、様々なことで悩みを抱えている生徒や保護者の支援に関する情報を積極的に発信していく。 ・ホームページ等を活用し、学校の取組等を発信する機会を多く持つようにする。地域の方々には、あいさつ運動やボランティアでの図書館の運営、花植えなどに協力していただいているので、コミュニティ・スクールの仕組みを活用しながら、地域の方々が学校に関わってくださることを生徒にもさらに発信していく。 ・防災教育として、地域で行われる自主防災活動への生徒の参加の可能性を模索していきたい。
					19 保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会、研修会の実施、地域の人材を活用することができた。	A					
					20 防災教育を推進し、安心・安全な学校づくりに努めることができた。	A					
				② 保幼小中の連携	21 子どもの校種間交流や教員の出前授業を実施することができた。	A	B	・校区の小中で合同OJT研修を行うことができた。 ・校種間の授業公開はできていない。 ・小中連携については、2学期から授業参観に行くことができたが、もう少し頻度を増やすことが次年度への課題である。 ・3学期には、新1年生の授業参観及び連絡会、出前授業を行うことができた。	A	・子ども庁が発足成立し、制度的には切れ目のない子ども政策があることから、幼小中のさらなる連携方法を工夫見直し、学習履歴等、教育データを活用した個別最適な学びの充実をお願いします。 ・小学校と中学校のつながりの希薄化。 ・特に小中連携は保護者の安心感にもつながるので、密にお願いしたい。 ・地域でのイベント的な研修会も大切でしょうが、日々の地道な実践、気づきこそ共有していくことが大切だと思います。 ・少子化の今日、幼保小中の交流は教員のみならず、子どもの交流には大きな意義があるのではと思います。ぜひ積極的な取り組みを期待します。 ・働き方改革との両立は困難でしょうが、人材不足にならない様にお願いします。	・OJT研修だけでなく、授業研究など、さまざまな場面で校種を超えた合同研修ができると良い。小中それぞれで行っている校内研究会にそれぞれの教職員が参加することで、カリキュラムや子どもの学びのつながりを考えることができる。 ・小中連携については、継続的に小学校に出向き、授業参観や情報共有を行っていきたい。また、保幼小中で子ども同士が交流する場面も設定できるようにしたい。
					22 校種間の合同研修会(ブロック研等)に参加できた。	B					
					23 校種間の授業公開やカリキュラム研究ができた。	B					
		8	組織的体制の充実	① 生徒指導体制の充実	24 いじめや暴力行為、不登校等生徒指導上の諸課題の早期発見、日常的な予防指導への全校体制がとれた。	B	B	・問題行動が起きてからの対応についての共通認識が必要である。さらなる、日々の学級運営や授業づくりにおいて、生徒一人ひとりが輝くことができる環境づくりを推進していきたい。 ・報告・連絡・相談と共有、事象後の生徒・保護者のアフターケアが課題である。 ・いじめに対する認識は、各教員間でのアンテナを高く張っている。 ・未然防止、早期発見のために各学年、情報の共有をし、迅速な対応を進めることができた。長期休業中には、タブレットでしおりに記入することで、生徒の状況を把握することができた。 ・長期休み後に教育相談を実施し、生徒の様子を聞くことで、生徒と担任、学年の教師とのコミュニケーションに機会を増やした。各クラスの様子を担任同士が積極的に交流することができた。 ・生徒の様子について家庭、関係機関との連携を密に取り、指導の方向性を相談しながら協力して指導にあたることができた。	A	・生徒数が減少する中、不登校生徒や教育的に支援を要する生徒等、問題行動が複雑化、困難化し、増加していると聞いています。心理的問題、社会自立、進路の観点から考える等、体罰暴言、いじめが背景にあることを見過ごすことなく発達支持的生徒指導をお願いします。 ・色々な項目で、家族支援の難しさに関する記述があり、先生方がとても悩んでおられることが伝わってくる。今年度、結局、書面で終わった不登校生徒への理解をもう少し深めたい。 ・いろいろな面での環境作りは大切だと思いますが、宜しくお願いします。いじめに対しても常にアンテナ高く意識していただきありがたいです。	・事案の相談と情報の共有、共通行動を確実なものにするために、主事、子ども支援コーディネーター、加配教員との報連相を密にする。 ・生徒の活躍や生徒会活動を積極的に生かす学校づくりを推進していく。生徒からの発信をより大切にしていきたい。 ・生徒が主役の学校となるように、生徒一人ひとりの居場所づくりを行い、安心して学校生活が送れるように、日常の声掛けや見守り、機を逃さない教育相談を進めていく。 ・生徒指導通信の発信を含めて、学校だけでなく、家庭、地域、関係機関と連携をとり、生徒を多くの目で見守ることをこれからも続けていく。 ・「気づき・考え・行動する」をキーワードに学校づくりを進めていきたい
					25 生徒指導、教育相談体制を確立し組織的に推進することができた。	A					
					26 家庭・地域・関係機関との連携による指導を図ることができた。	B					
				② 特別支援教育の充実	27 保護者の悩みを聞く個別相談を実施し、作成した個別指導計画を活用することができた。	A	A	・個別の指導計画を立案するにあたって「目標」「評価」を共有することで、保護者との連携を密に行うことができた。 ・特別な支援を必要とする生徒が増加傾向にある中、支援の必要な生徒の情報共有と支援の方向性の検討を継続して行うことができた。また、学校生活支援員の見立てや気づきを担任や教科担当と共有することにより、よりよい支援のあり方について考え、実施することができた。 ・配慮の必要な生徒や学校生活への適応に支援を要する生徒(とその保護者)について、関係機関からの助言をいただく機会を持ち、適切な支援につなげるとともに教職員の対応力の向上にもつなげることができた。 ・職員会議や研修会を通して、特別支援教育の充実を図ることができた。年々、多岐にわたる個別対応の必要な生徒が増加しており、保護者のニーズも高くなっている。定期的な研修は普段の支援を見直し改善する良い機会となっている。経験の浅い教師も増えており、今後も研修を積んでいくことは必要であると考える。	A	・特別支援を要する生徒さんや学級が増加していますが、先生方、保護者が必要な助言支援がタイムリーに受けられる指導助言体制の構築や理解啓発、支援指導の充実を願っています。 ・支援や配慮の必要な生徒が増加する中、保護者との連携や教師間の情報共有等、大変だと思いますが宜しくお願いします。	・特別な支援を必要とする生徒本人の困り感を把握し、その発達段階に応じた指導・助言ができるよう努める。同時に、本人だけでなくその保護者も悩みを抱えておられることを念頭に置き、共に考えていく姿勢を大切にしていく。 ・支援を必要とする生徒について適切な支援をすすめるため、専門家のアドバイスを生かせるように関係機関との連携をさらに深めたい。1学期(または2学期)に、専門家を招聘して“気づき・見立て・手立て”に関する研修会を実施できるように計画する。これらのことは今後も継続し、教員全体で特別支援に関する見識を深めてゆきたい。 ・支援計画(個別の指導計画)を全職員で共有し教職員の意識をさらに高めるために、共有の機会の設定やクラスごとの手立てのまとめ方などについて考える。合理的配慮について研修をすすめ、組織として支援する力をつける機会を設ける。
					28 組織的・計画的な特別支援教育の体制を確立することができた。	A					
					29 関係機関と連携しながら相談活動を充実させることができた。	A					

		9	学校満足度	30	生徒は学校に対して満足している。	A	A	・不登校生徒の増加が気になるが、概ね学校生活に満足して一生懸命に行事や学習に取り組んでいる。 ・今年度より校内WINGが開始された。不登校生徒の居場所作りとなり機能しており、午前中は担当教員が張り付くことができた。 ・アンケート結果によれば、約88%の生徒、約87%の保護者が、学校生活を楽しいと評価している。	A	・様々な課題がある中、誰一人とて取り残さないという思い、未来に向かって教育の在り方を考えてくださっていただいている校長先生はじめ、先生方の実践に感謝しています。 ・不登校も自分の選択の1つ。何をしたいのか？何に興味があるのか？それを伸ばせば良い。 ・90%近い評価は素晴らしいと思います。校内Wingに期待しています。 ・アンケート結果はあまりあてにならないと思います。わざわざ悪く言うほどでもない場合「楽しい」と答えるので。不登校生徒が学校に増えていて気になる。不登校については難しい問題だと思うが、「なぜ登校できないのか」という核の部分から向き合っていただきたい。 ・不登校の理由が気になります。 ・90%台を期待しています。	・「楽しい」と感じていない約12%の生徒に目を向け、授業や生徒との関わり方を見直し、生徒や保護者との信頼関係の構築に全教職員で取り組む。 ・「校内ウイング」をはじめ、不登校生徒の居場所づくりとともに、生徒が安心して学校生活が楽しいと感じられるように、きめ細やかな取組指導に努める。